

# 第1章 戦場

樺太からの引き上げ①

## ソ連兵が家に！

武石幸次さんのお話から

○留多加 表紙裏地図

○艦砲射撃 軍艦に備えつけてある大砲などから弾丸を発射し、ねらい撃つこと。

私は、昭和九年（一九三四年）、樺太の南側に位置する留多加で六男三女の五男として生まれました。昭和二十年の終戦当時もそこで暮らしていました。思い出すのはソ連兵が上陸進軍してきたことです。

同年八月二十日、ソ連軍は早朝から真岡に艦砲射撃を行い、上陸し、留多加に進軍してきました。当時私の家には父と母、そして兄姉と住んでいました。戦いに巻き込まれないように、女性と十歳以下の子どもは川向かいの酪農家に避難することとなりました。母や姉たちは避難し、私の家には、父と兄、私の三人が残りました。

私は当時十一才になるうとしていましたが、夜になると怖くなり布団の中で丸くなっていました。ふと気が付くと、夜なのに外があまりにも明るいので見ると、アメ工場が燃えていました。ソ連軍がやったものだと父が言っていました。

私の家には三度ソ連兵がやって来ました。一回目は昭和二十年八月二十一日、ソ連軍が上陸した次の日です。窓を壊れるほど叩かれました。父がおそるおそる開けると、大きなマンドリンのような鉄砲を持った三人のソ連兵が入ってきました。そして、酒とタバコを要求してきましたのです。

一人は玄関で見張り、一人は茶の間、もう一人の兵士は家の中を探しまわり、父に対して、まず酒を飲むまねをして酒を要求しました。父はドブロクを作っていたのでそれを差し出すと、父に毒味をしろと先に飲ませました。大丈夫なことが分かると、兵隊たちが順番に飲みました。

○ドブロク 白くにっぽた酒。にこりざけ。

○銃剣 銃の先につける  
 剣。ふだんは鞘に収め腰  
 につけていて、突撃や接  
 近戦のときに装着する。  
 また、その剣をつけた小  
 銃。

言葉が通じないので兵隊たちは身振り手振りで命令してくるのです。酒を飲み終わると今度はタバコを吸うまねをして、タバコを出せと要求しました。父が刻みタバコを差し出すと、それを新聞紙で巻いて順番に吸い、その後酒に酔ったせいか帰っていききました。次の日の朝、お礼だと言って、小さくなったがりがりの黒いパンを袋に入れて置いていききました。

二回目は翌日の晩に別の兵隊がやって来ました。今度は前日に比べ程度が悪い兵隊たちでした。食べ物や飲み物には不自由していかないよう、時計や指輪などの金目の貴金属類と皮のトランクやベルトを要求してきました。

三回目は三人の民兵でした。その三人が一番、たちが悪かったのです。家の中の隅から隅まで、押入れまですべての戸を開け、鉄砲の先の銃剣で布団をまくり、さらに天井に向けて二発発砲した上帰っていきました。鉄砲を撃ったときは本当に恐ろしい思いをしました。

その後父は、家族を守るために家



イメージ図

ソ連兵による略奪

○将校 軍隊において、戦闘の指揮をする士官。少尉以上の武官。

○常駐 つねに一定の場所にとどまっていること。

○兵舎 兵隊が寝たり食べたりするなど、日常生活をする建物。

を改造して二人のソ連将校を雇って常駐させました。私の父は大工でした。

昭和二十一年、樺太から日本への引き揚げが始まりました。しかし、私のところは、父親が大工だったために、ソ連軍の兵舎をつくるのに引っ張られたんです。そのために引き揚げの証明書が配給されないのです。兵舎でできるまではだめということで、私たち家族七人は残されたのです。

昭和二十二年九月下旬、ソ連軍から引き揚げてもよいという証明書をもらいました。それで、やっと引き揚げることができるようになりました。

私たちは留多加をあとにして列車で真岡港を目指しました。列車には日本兵も乗っており鉄砲を持ったソ連兵に監視されながら降りました。その日から数日間、日本からの船を待つために、港の近くの高台に設けられた細長いテントで過ごすことになりました。

当時のことで特に思い出すのは便所のことです。沢と沢の間にかけた橋の板に三十センチくらいの穴をたくさんあけただけのもので、当然仕切りもありません。夜になると真っ暗の中で



イメージ図

引き揚げ船を待つ日々

便所に行かなければならず、本当に怖い思いをしました。

三日後にはテントから近くの中学校に移動し、日本から船が来るのを首を長くして待っていました。そして二か月後にようやく日本からの船がきて北海道に戻ることができたのです。

北海道の親類を頼って留萌に住むこととなりました。当時私は中学一年生でした。

樺太では終戦当時教育を受ける環境がほとんどなく、私は、小学校五・六年生の頃の勉強をしていません。そこで小学校六年生に編入しようとしたのですが、満員で断られ中学一年生に入ることになってしまいました。入ると私にとってはあまりにも勉強が進んでおり、特に国語と数学は全くだめで他の生徒についていくことができません。そのため、学校を休みがちになってしまいました。今でいう不登校です。

しかし、中学二年生になった頃に、とてもよい担任の先生がおり、毎日放課後に一時間程度、小学校の算数と国語の補習授業をしてくれたのです。それを二、三か月続けてもらった結果、なんとか他の生徒について行けるようになりました。

私は戦時中がちょうど小学生でしたので、その勉強が大切な時期に、ほとんど学校での勉強ができませんでした。そして、あとで苦労したことが思い出されます。戦争は、子供の教育もうばうのです。平和な現在、しっかりと勉強ができる時期に一生懸命にやるのが大切であると感じています。

DATA

平成20年度西区平和事業

聴き取り

- ・平成20年7月25日
- ・西区役所



.....

武石幸次(たけいし・こうじ)さん

- ・昭和9年(1934年)生まれ
- ・札幌市西区在住